

「高齢者住宅新聞」2012年10月15日号に インディペンデンスヴィレッジ成城西の連載 第6回目が掲載されました。(最終回)

今回は高橋明子様へのインタビューです。

最終回 尊厳は選択権にあり

高橋明子さん(74歳)は入居した9年前、全国的に珍しかった分譲型シニアマンションへの入居について、「是か非か」友人らに意見を聞いた。



「生協活動をしていた大学時代の友人はNO、民間シンクタンクで有料老人ホーム調査を行っていた後輩の研究員の友人はYES。意見が1票ずつに割れた。最後は自分の将来設計をどう描くかで決めるしかない」

「高知の両親を妹と遠距離介護をして見送った経験から、できる限り親族に迷惑をかけずに生活したい」65歳の若さで入居。当時は早すぎる入居だと振り返ったこともある。

高橋さんの最終判断はYES。理由はこうだ。

「高知の両親を妹と遠距離介護をして見送った経験から、できる限り親族に迷惑をかけずに生活したい」65歳の若さで入居。当時は早すぎる入居だと振り返ったこともある。

高橋さんは大学で経済を学んだ後、民間シンクタンクに入社。その後は研究員として長年、消費者問題研究に注力してきた。実態から問題を分析し、事実を読み解く経験が高齢者住宅選別に役立った。

自分で決めていきたい



高橋明子さん(74歳)

人ホームに傾いていた。研究員時代の知人が有料老人ホームの入居実態を調査した。その内容が明暗を分けた。

「入居者のメリットとデメリットを分析する内容。知人と議論した結果、『自分に合った有料老人ホーム

を選ぶのは容易なことではない」ということがわかり、有料老人ホームという選択肢に陰りが出てきた」

生活を実験してみないと、その暮らしが自分にとって快適なものかどうか分からない。当時は途中で退去したくても、クーリングオフ制度などない時代。そのマンションで自分の死を刈り取ることは可能だと気が持たず変化した。

「入居当初は「最後の住まいにしたい」とは思っても、後々は有料老人ホームに住み替えなければならぬ」と決めた。

高橋さんは、「最終決定は自分でしたい」思いが強

を主体的に豊かにできると気づいたから。年齢とともに変化するニーズにも対応してくれることもわかってきた。

「想定外だったのは入居者やスタッフから多様な知恵を得られること。高齢化社会として世界から注目される中で、住民としてこのマンションに参画できるのを誇りに思う」

【取材協力・インディペンデンスヴィレッジ成城西】
東京都狛江市。生活支援付きの高齢者向け分譲マンションとして平成15年に竣工。全68戸。